

人を呪わば やさしきさつ

現代、わら人形考

こじらせた怒りは時に「呪い」へと形を変える。「呪い」なんて迷信？ いや、呪い文化は現代にも深く息づいている。呪いの意外な効能とは。

今年1月、群馬県で、釘を刺したわら人形で女性を脅した容疑で男性(29)が逮捕された。神社で深夜、相手を見立てたわら人形に五寸釘を打ち付けた「丑の刻参り」と呼ばれる呪術は、古来伝わる最もメジャーな方法

だ。冒頭の事例のように、わら人形を見せるなどして相手に加害の意思を示した場合には脅迫罪に問われるが、今日の日本では、この呪いの手順を実行しただけでは罪には問われない。対象に何か不幸が起きたとしても、

因果関係に科学的な説明がつかないからだ。つまり、呪いなどというものは、効かないことになっていく。では、呪い文化は本当に衰退したのか。まずは丑の刻参りの痕跡を探そうと、京都へ向かう。

緑結びで有名な大観光地で、修学旅行生で年中賑わう地主神社(京都市東山区)。ここにはかつて女性たちがわら人形を打ち付けた釘の跡が残る大きな杉のこ神木がある。

「白装束の女性を見た」

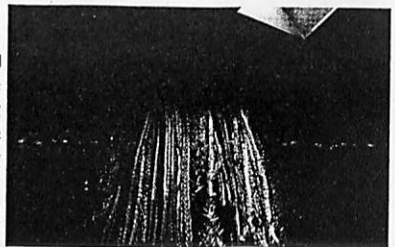
「現在ご存命であれば100歳前後の人から、「子どもの頃、この杉のほうに向かう白装束の女性を見かけた」という体験談を聞いたことがあります」と話すのは同神社の中川勇権宮司。だが意外にもこんな話が続いた。

「丑の刻参りは一見おどろおどろしいようですが、実は当の女性も冷静だったのでは。カットなって相手を刺し殺したりするのではなく、白装束を着て、ロウソクを立てた鉄輪を頭にかぶって、と手続に従っている。当時、電灯もない山道を夜中に一人でここまで上がったのは、とても怖かったはず。それでも女性の立場が弱く平等等だった時代には、呪術にすがりしか解決方法がなかったのでは」

国内外の呪術に詳しい神戸大学大学院の梅屋潔教授も、人類学・民俗学の観点から、「呪いには、弱者から強者への抗議という社会的機能がある」と説明する。

菊野大明神

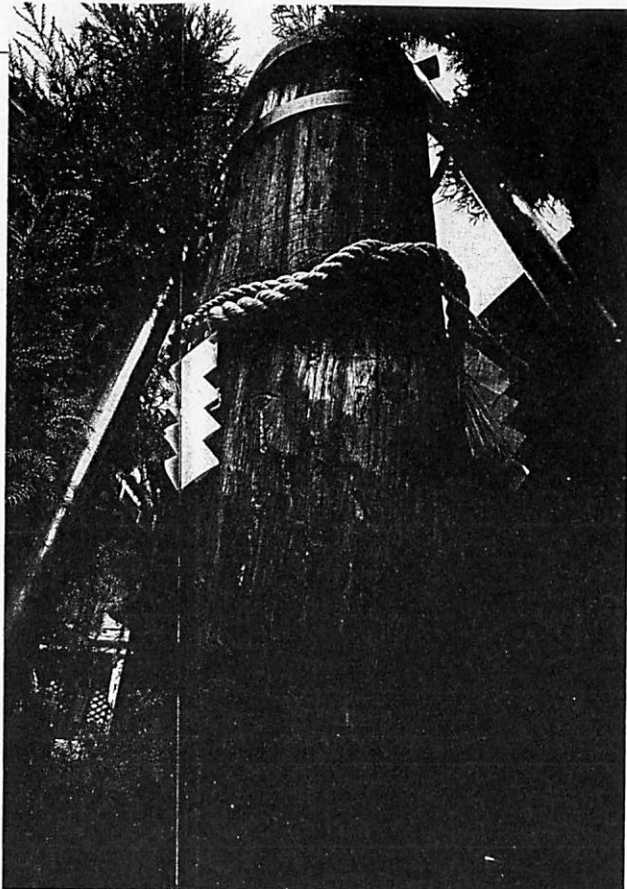
病気の縁切りを願った石将少将の遺体も奉納されている。石将少将は、平安時代、深草の御所へお参りした際、一夜を過ごしたと伝わる。石将少将の無念が宿るとされる。



社会的に取りうるる正当な手段が尽きたとき、人は呪いに訴える。感情に任せての行動ではない、と教授は言う。

「実名人」でびっしり

次に向かったのは、同市中央区の法雲寺内に祀られている菊野大明神。知る人ぞ知る縁切りスポットだ。最近ではほとんどないが、かつてはわら人形が置かれることもあった、と話してくれたのは先代住職の妻の伊藤悦子さん。見つけた場合は必ず撤去するという。



「恨みつらみは自分のためによくありません。あくまで自分の今後のためにお参りをしてほしい。縁を切り、良縁を頂いてほしい。神様にお参りすることで自分が強くなれる、心が保てる、という効果もあるのでは」

ネットでセツト販売も

近年では、男女問わず、職場での人間関係に悩み、訪れる人も。絵馬にはやはり実名を挙げた「一生関わることをなく生きていきたい」などがある。

地主神社

「誰にとつて何が不幸かは、神様が決めること。これを願ったらいけない、ということはありません。神様がかなえてくれるかどうかは別の問題ですが」

「一人に言えない悩みを絵馬に書くことで気持ちが済むのなら、それも信仰のひとつの効果ではあると思います。ただ最近では、自分が気に入らないからといって、悪い縁、と短絡的に決めつける例も多いようです」(鳥居宮司)

「呪いとは多くの場合、秘密裏に行われる孤独な行為です。秘密を持つことをつらいと捉える人もいますが、ある種の優越感を感ずる人もいます。呪いを行って

いるという秘密を持ちつつも日常生活を送っている場合、そのことが本人に精神的余裕をもたらしているかもしれない。超自然的なものをお金で信じているとすれば、メンタルは健康な方向に向かってしまいう危険があるが、半ば迷信と自覚しているのなら、自分自身の怒りや恨みを客観視する契機になる、と春日さんは言う。

安井金比羅宮

建物の由来は不明だが、安井金比羅宮の御祭神は、安井金比羅宮の御祭神とされている。安井金比羅宮の御祭神は、安井金比羅宮の御祭神とされている。



「呪いという最後の手段が残っている限り、人は相手を正しく恐れることができる。呪いが隠し持っているある種のやさしさを、私たちは必要とし始めているのかもしれない。」